

KONAN UNIVERSITY

二字漢語の日中同形語について：「刺激」を例に

著者	中畠 孝幸, 王 超文
雑誌名	甲南大學紀要. 文学編
号	169
ページ	3-7
発行年	2019-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00003246

二字漢語の日中同形語について

——「刺激」を例に——

中 畠 孝 幸

王 超 文

1. はじめに

中国語話者にとって、日中同形語が多く存在することは日本語習得の際に大きな助けとなる。逆に、日本語話者が中国語を習得する場合にも同様のことが言える。ただ、同形語であっても、実際には文法上あるいは意味上、日本語と中国語の間にずれが存在することが多いため注意を要する。

たとえば、台湾人学生が実際に書いた文に「遊園地へ行ったら、必ず刺激なジェットコースターに乗る」といった例がある。これは中国語文の「去遊樂園的話，一定要坐刺激的雲霄飛車」を日本語文にしたものであるが、日本語と中国語に存在する同形語の「刺激」が、文法的にも意味的にもずれがあることをよく示す例である。まず、文法的には、日本語の「刺激」は名詞として、あるいは「刺激する」という形で動詞として使うものであり、形容詞としては使われない（もし形容詞として使う場合には「刺激的な」としなければならぬ）のに対し、中国語では形容詞としても使われるため、「刺激な」という言い方をしてしまうこと。次に、意味的には、たとえば先の例を「刺激的なジェットコースター」としたとしても、やはり落ち着かず、むしろ「ドキドキ（わくわく）するジェットコースター」のような日本語表現の方がふさわしいように感じること。それら文法的、意味的な問題を克服できれば、学習者は日中同形語の存在をうまく活用して日本語学習の成果をあげることができるはずである。

本稿では、46名の台湾人学生が「刺激」という語を用いて作った日本語文をもとにしながら、誤用文と思われる例を中心に分析して、二字漢語の日中同形語の文法的意味的ずれの問題を考察し、日本語教育において日中同形語を扱う場合にどうすればよいか具体的な提案を行う。

2. 先行研究

本論に入るまえに、二字漢語の日中同形語に関する先行研究にこれまでどのようなものがあったかについて概観し、それをふまえた上で本稿が目指す目的を明らかにしたい。

まず、日中同形語研究の先駆けとして、多くの同形語を（二字漢語だけでなく一字漢語も）取り上げて意味の異同に注意を喚起したのが、文化庁（1978）である。文化庁（1978）では、日中同形語を(1)「日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの」、(2)「日中両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるもの」、(3)「日中両国語における意味が著しく異なるもの」、(4)「日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの」の4種類に分類した。その結果、(1)が全体の三分の二、(4)が全体の四分の一を占め、残りが(2)(3)であるとする。日中辞典と中日辞典を資料として、辞書の対照により作成された資料である。そのため、細かな点に目を向けて検討を加えれば、(1)の数がもっと減少して(2)(3)の数が増加することが予測されるが、日本語教育において日中同形語に着目することの意義を説いた点に大きな価値を見出すことができる。尚、本稿で問題とする「刺激」は、文化庁（1978）が漢語の選択に用いた日本語教科書10冊の中に出現しなかったためか、掲載されていない。

次に、語数は限定されるが、意味の上から注目すべき日中同形語を選択し、その違いをやや詳しく述べているのが大河内（1992）である。大河内（1992）のもととなったのは、日本語と中国語対照研究会編（1986）である。それは49個の形容動詞（本稿ではナ形容詞）について、日本語と中国語における用例を挙げ、文法的機能や意味的特徴を解説した資料である。大河内（1992）はそのうち、「明朗」「潔白」「温暖」「陰悪」「柔軟」「熱心」「有力」「莫大」「熱烈」「正直」

「高尚」「親切」「重大」「深刻」「頑固」といった語について、日本語と中国語でそれぞれどういった語と結び付き、どう用いられるかについて、例文を挙げながら意味の重なりとずれを細かく記述している。大河内(1992)は、「日本語には類似の意味の和語と漢語の分業があるが、中国語にはそれが無い」とし、中国語の「明朗」に対し日本語の「明朗」は意味領域が狭く、その足りない分を「明るい」という和語が補っているという趣旨の説明をしている。これは傾聴に値する指摘であり、日中同形語同士を比較するだけでは、表す意味が同じであるとか、ずれているとか論ずるだけで終わってしまうという問題点に気づかせる論考である。本稿は、大河内(1992)が言及する和語だけでなく、外来語も含めて、異なる語種に属する複数の類義語が意味的にどのような分担をしているかを示すことが日本語教育において必要であることを主張する。

ところで、日本語と中国語対照研究会編(1986)や大河内(1992)には「刺激」の語が掲載されていない。それらに掲載されている語はすべてナ形容詞であるのに対し、「刺激」は日本語ではナ形容詞として用いられないためであると推測できる。本稿では、日中両言語で品詞上のずれがある「刺激」という語をあえて取り上げ、学習者が日中同形語を日本語で用いる際の意味的問題ばかりでなく、文法的问题もあわせて取り上げようとするものである。

次に、大量の日中同形語を収録したデータベースを用いて品詞性の対応関係を明らかにしたものと、熊・玉岡(2014)がある。同研究は、日中同形語のずれについての先行研究を「意味に関する研究」と「品詞に関する研究」に分けて詳細に検討した上で、品詞に関する研究は充実していると言い難いとして、複数の辞書をもとにデータベースを作成して、1,383語を対象に日中両言語の品詞性の対応関係を記述している。熊・玉岡(2014)では、ある語について、品詞情報が掲載されている2つの中国語辞書の記述が不一致の場合には、品詞性の判断が不明であるとしている。本稿で扱う「刺激」は、その品詞性の判断が不明のグループに入っているため、「刺激」が日中両言語でどのような品詞性の対応関係にあるのか、熊・玉岡(2014)から窺い知ることはいくつかできない。

日本語教育に関連して習得研究の立場から誤用例をもとに考察を進めている研究もある。例えば、五味・今村・石黒(2006)では、学習者が「低下する」という動詞を「低下になる」のように使ってしまう点に着目し、変化に関わる語彙で学習者がそのような表現を

しがちである理由について考察している。

また、張(2009)は、中国人学習者の作文に見られる母語転移の諸類型を明らかにしたものである。その中で日中両言語の品詞性のずれに関しては、9種類の対応が見つかったことを報告している。張(2009)が挙げているタイプの中で、本稿が扱う「刺激」がどのタイプに属するか考えてみると、中国語では形容詞、動詞、名詞で、日本語では動詞、名詞のみで使われる「失敗」が属するタイプに一番近いようである。しかし、「刺激」が「刺激的」と「～的」が付くのに対し、「失敗」は「失敗的」とはならないし、また、「刺激する」が他動詞として使われるのに対し、「失敗する」は自動詞として使われる。そのような違いを考えると、「刺激」のような日中同形語の品詞性のずれのタイプを新たに考えなければならないのかもしれない。張(2009)もまとめの中で「品詞性がずれているパターンを一層正確にすること」が課題として残っていると述べている。本稿はそのような研究を発展させる一助になればいいと考えている。

3. 「刺激」に関する文法上・意味上のずれ

「刺激」という語を日本語学習者は実際にどのようなに使っているのであろうか。それを明らかにするため、以下のような調査を行った。まず、上級レベルの日本語学習者に「刺激」という語を用いて自由に日本語文を2つずつ作成してもらった。対象としたのは、台湾の東海大学で日本語を専門に学んでいる大学3～4年生46名である。日本語文を書いてもらうほか、本人が表そうと意図した意味が明瞭になるよう、その日本語文には中国語訳を付けてもらった。一人2文ずつの作文により、全部で91の文が集まった(うち一人が1文しか書いていなかったため)。それを文法上、意味上の観点から分析した¹⁾。

まず、文法的な観点から、作られた日本語文の中で「刺激」がどのような品詞で用いられていたかを示すと以下ようになる(「刺激をする」のような助詞が付いた例は「刺激」を名詞として数え、「刺激する」は動詞として数えた)。

名詞として…45	動詞として…24
「刺激的な」…7	「刺激な」…13
「刺激すぎる」…1	「刺激性的な」…1

ここで、名詞として使われている文は、日本語でも中国語でも「刺激」を名詞として使用可能であるため、文法的には問題がない。「彼の成功は彼女に刺激となっ

た」(他的成功刺激了她)「適度な刺激は身体にいいです」(適當的的刺激對身體好)といった文である。

動詞として使われている文も、「病人を刺激する話をしてはいけません」(不能說刺激病人的話)「学習意欲を刺激する」(刺激學習欲望)のように使えている例においては文法的に問題が見られない。これら名詞、動詞として「刺激」を使用した例は、日中両言語に同形語があることのメリットを生かし、正の転移が働いた場合と考えることができる。ただ、意味的に「刺激する」が使えない場合が多々あるので、それについては後述する。

「刺激的な」も、文法的には問題がないが、意味的には日中両言語間でずれがあるので、それについても後述する。

文法上、最も問題が大きいのは、「刺激な」という形式を使う学習者が多いことである。13例集まったが、一人1例ずつ出現したので、46名中13名が「刺激な」という形式を使ったことになる。今回の調査では、品詞の指定をせず自由に文を作ってもらったため、13名以外にも「刺激な」を使ってしまう可能性のある者は少なくないとみられる。

(1) 子供ですから、刺激な映画を見ないで。(因為你是小孩，所以別看太刺激的電影)

(2) 私は刺激な食べ物食べられない。(我不能吃刺激性食物)

中国語では「刺激」を形容詞のように用いることができるのに対し、日本語では「刺激」を形容詞としては使わないため、負の転移により、(1)(2)のような文が生じると考えられる。直し方としては、「刺激な」を「刺激的な」とすることが真っ先に思い浮かぶが、(2)で「刺激的な食べ物」とするとやや違和感があることから、「刺激が強い」という表現がむしろ汎用性が高く、教える価値もあると思われる。

「刺激すぎる」という形式も、「簡単すぎる」「煩雑すぎる」といったナ形容詞語幹に「すぎる」が付いた表現からの類推として使ってしまうのだと考えられる。次がその例である。

(3) 刺激すぎるので、放棄しました。(因為太刺激了，所以放棄了)²⁾

また、次のような「刺激性的な」という表現が現れるのも中国語からの転移であろう。

(4) 胃がよくない人は、刺激性的な食品を食べないほうがいいですよ。(胃不好的人，最好不要吃刺激性的食物喔)

この(4)においても、「刺激性的な食品」は、ただ

「性」を取り去って「刺激的な食品」とするのではなく「刺激が強い食品」としておけばよいであろう。

さて、このように誤用が生じやすい「刺激」と同類の語としては、「進歩」「発達」「普及」「熟練」「成熟」「充実」等が挙げられる。いずれも形容詞としての用法はないため、「進歩な」「発達な」「普及な」「熟練な」「成熟な」「充実な」といえない点が共通している。

ただ、「進歩」「発達」「普及」「熟練」「成熟」「充実」等は「する」を付けて動詞として使う場合、自動詞であり、述語として言い切りに用いるには「～している」としなければならない。また、名詞修飾の場合「～した○○」「～している○○」となる。それは日本語学習者に対する重要な教授項目となる。ところで一方、「刺激」は他動詞であり、名詞修飾の仕方もやや異なる。たとえば、まず次のような誤用があったとしよう。

(5) 彼は進歩な考えを持っている。(他思想進歩) 教授者は「進歩な」を「進歩した」に直すであろう。そのように指導された経験のある学習者は、その原理を「刺激」にも適用してしまう可能性がある。実際に次のような文を作った学習者がいる。

(6) 最近刺激した映画がありますか。(最近有比較刺激的电影嗎?)

(7) 刺激したゲームは子供に大好き。(小孩子最喜歡刺激遊戲)

これらの例において、文法的には「刺激的な」とすることで誤用が回避できそうであるが、中国語話者が言おうとした意味は、むしろ「はらはらどきどきするような」とか「エキサイティングな」といったことである。文法的に適格と思われる「刺激的な」を使った文の中にも、意味的にやや相応しくないものが見られる。次の例をみてみよう。

(8) 医者に刺激的なものは食べないように言われた。(醫生叮嚀我別吃刺激性食物)

(9) 山田さんは小説を読むことが好きです。特に刺激的な小説が大好きだ。(山田先生喜歡看小說。而且他特別喜歡看有刺激性的小說)

(10) 年をとった人にとって、刺激的なスポーツをやるのに合わない。(對於上了年紀的人來說，不適合從事刺激的運動)

(8)(9)は「刺激の強い」の方が相応しいようにも感じられるが、「刺激的な」は許容範囲であろう。(10)はやはり不自然で、「激しい」とか「スリリングな」とか言うべきところである。

意味的に「刺激」は、日中両言語で重なる部分があるものの、重なり合わない部分があること、特に、日

本語では「刺激」を使わず「ショック」「ダメージ」といった語の方が相応しい文脈があることに注意する必要がある。

例えば、学習者は次のような文を作る。

(11) 母の死亡は彼にとって刺激するんだ。(母親的
死对彼來說会刺激到他啊)

(12) この事件は民衆に大きな刺激を与えました。

(這件事情給了民眾很大的刺激)

上の文において(11)は「母の死は彼にとってショックだ」、(12)は「この事件は民衆に大きなショックを与えました」とすべきところである。(12)は文として適切に見えるため、教授者も見過ぎてしまいがちであるが、実際に学習者が日本語で言おうとしたのは、「刺激」ではなく「ショック」ということである。

このような意味の上でのずれは、どのような語であってもあり得ることで、日中同形語の場合、そのずれに教授者も学習者も気づかないで実は誤解したまま通り過ぎることがありがちである。ただ、辞書を注意深くみれば、そのようなずれは記述されていることも多い。例えば、『講談社中日辞典第三版』において“刺激”の項目には「ショック」の意味が記載されていて、「他精神上受到了很大的刺激」(彼は精神的に大きなショックを受けた)の例が挙げられている。しかし、「刺激」のように中国語話者が既に知っている語について、作文の際に中日辞典に当たることは稀であろう。知っている語の場合、自分の知っている中国語の意味を当てはめて日本語文を作ってしまうのが一般的である。

それでは、そのような負の転移を回避するために、日本語教育においてどのような方策をとったらいのであろうか。次節ではその点について考察する。

4. 日本語教育における日中同形語の 取り上げ方

日中同形語は、うまく活用すれば学習者を正の転移に導くことができる。見ただけで意味の手がかりがつかめるとするのは、漢字圏学習者にとって大きな利点であり、非漢字圏の学習者には期待できないことである。漢字圏学習者の強みを生かし、さらに日本語学習の効率を上げるためには、日中同形語だからといって、学習者にとって問題がないと過信せず、何もしないでほうっておくということ evitar ののが肝要である。

では、具体的にどのような方策をとったらいのであろうか。文法的には、言い切りの場合、名詞修飾の場合についてどのような形をとるか確認する必要がある。「刺激が強い」「刺激が強い○○」とは言いが、

「刺激だ」「刺激な○○」と言わないこと。接辞が付いた場合も、「～的」「～性」といった漢語系、「～すぎる」「～がる」「～っばい」といった和語系、「～チック」といった外来語系、それぞれについて、学習者のレベル、学習の進度によって適宜取り入れて意味用法の理解を促すとよいと思う。漢語だけでなく和語や外来語が適度に混ざった文が作れば、ごちないという印象を避けることができる。

意味的には、日中同形語について、中日辞典、日中辞典に当たれば、意味の重なりやずれについて、ある程度認識を深めることができるであろう。例えば、「曖昧」という日中同形語について、王(2012)は、辞書やコーパスを駆使して、かなり詳しく意味用法の重なりとずれを記述している。もしも日本語学習者が、王(2012)に記されているような手順を踏んで細かな分析を行うのであれば問題ない。ただ、一般的に学習者は、日中同形語の場合、中国語の意味を当てはめて日本語を理解し、中国語の知識を援用して日本語文を作ることが多いと言える。学習者がそうであるとすれば、教授者側が日中両言語間のずれた部分を意識的に理解してそれを指摘する必要がある。

しかし、そうは言ってもすべての教授者に中国語の知識を求めることはできない。そこで考えられるのが、語種の違いを超えた類義語をまとめて教えるという方法である。河住(2005)には、学習者が漢字語を使用した場合のさまざまなタイプの誤用例が挙げられているが、その中に「出現しました」を「現れました」とした方がいい誤用例、「圧力」を「ストレス」、「商人」を「ビジネスマン」とした方がいい誤用例などが紹介されている。それらを見て感じるのは、そのような誤用が出るのは、教科書で日中同形語を扱う時点で、その漢語に意味的に隣接する和語、外来語を教えていないことが原因なのではないかということである。語種の異なる複数の語による意味の分担を理解してもらうことが、より自然な日本語文を作るのに有効なのではないかと考えられるのである。

本稿で取り上げた「刺激」について言えば、「刺激」という語が出た時点で「ショック」という語も同時に教え、その意味の分担を知ってもらう。「刺激」は既に理解している語で、「しげき」という読みが新しい学習事項であるに過ぎないから、中国語母語話者にとって負担は軽いはずである。その負担が軽い分、新たに「ショック」という語を使った文を教え、中国語の“刺激”が表す意味が日本語ではどのような語を使って分担して表されているかを知ってもらうのである。

本稿第2節で、大河内（1992）が「日本語には類似の意味の和語と漢語の分業があるが、中国語にはそれがない」と指摘していることに触れた。大河内（1992）は、日本語において「明朗」と「明るい」、「潔白」と「白い」、「温暖」と「あたたかい」、「陰悪」と「おそろしい」、「柔軟」と「やわらかい」、「有力」と「力強い」、「莫大」と「大きい」、といった漢語と和語が並立して意味を分担していることについて触れながら、中国語の二字熟語が表す意味の範囲を、日本語では同形語の漢語とそれに加えて和語がカバーしているということを述べている。確かにそれはどの語についても当てはまることであり、本稿で主張している外来語を含めた類義表現を同時に導入することを進めることで、学習者にとって日中同形語を適切に用いて誤用も減らすことが可能になると思われるのである。

5. おわりに

本稿では、日本語の「刺激」という語を中国語母語話者が用いた場合にどのような誤用が出やすいかを台湾人学生に対する調査から明らかにした。そして、そのような誤用が出る原因として、日中同形語の文法上、意味上のずれが関係していることを述べた。日中同形語に関わる誤用を防ぐためには、日中両言語間の文法的な違いに着目するだけでなく、意味的に、漢字語と補い合う関係をもちながら存在する、語種の異なる和語、外来語を含めた類義語を同時に導入することが効果的であるという結論に達した。

本稿で取り上げたのは「刺激」という限られた語であるが、日中同形語を考える上では意味のある語である。この研究をもとにして、「刺激」と同じタイプの日中同形語にはどのようなものがあるか、また違うタイプをどんな基準にしたがって認定したらよいか、といった問題を考える出発点にすることができると思われる。

教授者が中国語を理解するとは限らないので、中国語の分からない教授者にも分かりやすい、日中同形語を核とした類義語辞典形式の資料を作ることができれば効率的な教育に資するであろう。

また、「刺激」に「的」が付いた「刺激的」も言ってみれば日中同形語である。日本語と中国語の間で「刺激的」の意味用法がどう異なるのか、「刺激的」が形容する語にどのような違いがあるのか、興味深い問題である。詳細はいずれも今後の課題としたい。

【注】

- 1) 調査は2007年に中島が在外研究で東海大学に滞在中に実施したものである。
- 2) 本稿で取り上げる日本語学習者が作った文には、「刺激」に関する点以外にもところどころに誤用と認められる箇所がある。例えば、(3)の文中の「放棄しました」は「やめました」「あきらめました」等に直した方がいい。本稿ではそういった「刺激」以外の誤用の指摘は今後行わず、「刺激」に関する部分についてのみ触れる。また、中国語文の表記は本人が書いたまま基本的に繁体字を使用しているが、時に簡体字や日本の漢字字体が混じることがある。本稿ではそれも元のまま示している。

【参考文献】

- 庵 功雄（2008）「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』11
- 大河内康憲（1992）「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』くろしお出版
- 王 志英（2012）「中国語の“曖昧”と日本語の「曖昧」の違いについて—小学館日中・中日辞典 第2版を参考に—」『日本言語文化研究』16
- 河住有希子（2005）「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』7
- 五味政信・今村和宏・石黒圭（2006）「日中語の品詞のズレー二字漢語の動詞性をめぐって—」『一橋大学留学生センター紀要』9
- 張 金艶・谷守正寛（2013）「中国人日本語学習者による日中同形語の誤用について—共有する意味を持つ「参考」「緊張」「注意」「一時」の場合—」『鳥取大学教育研究論集』3
- 張 麟声（2009）「作文語彙に見られる母語の転移—中国語話者による漢語語彙の転移を中心に—」『日本語教育』140
- 日本語と中国語対照研究会編（1986）『日本語と中国語の同形語(1)』昭和60年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書
- 文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 熊 可欣・玉岡賀津雄（2014）「日中同形二字漢字語の品詞性の対応関係に関する考察」『ことばの科学』27